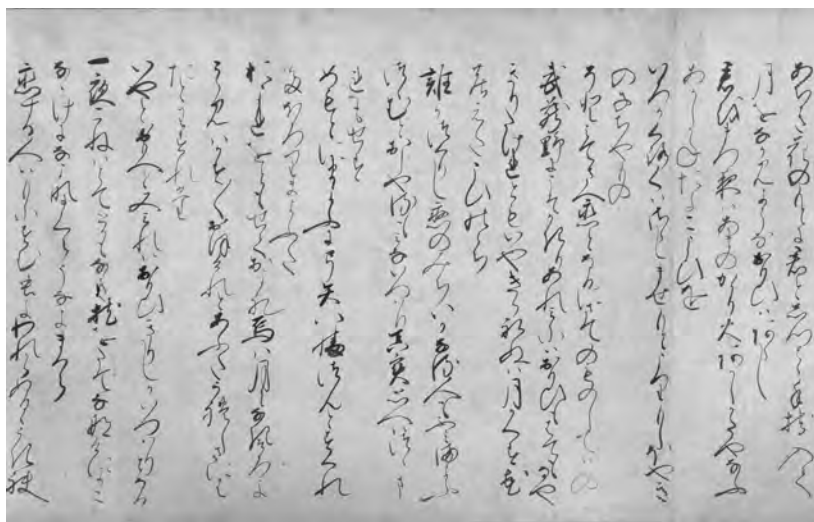


中世の人々の「歌う心」を伝える

— 『宗安小歌集』 『隆達小歌集』 —



『宗安小歌集』



『隆達小歌集』 隆達の署名と自筆の小歌一首

小歌は、中世後半から近世初期に流行した短章の歌謡である。ほとんどは室町時代の成立と考えられるため、室町小歌とも呼ばれる。小歌を集録した最も早い資料は、永正十五年（一五二八）成立の歌謡集『閑吟集』で、全三十一首のうち約四分の三を小歌が占める。ただし『閑吟集』はわずかに三点の写本が伝わるのみで、残念ながら国文学研究資料館には所蔵しない。

これに次ぐ小歌の集成として知られるのが、国文学研究資料館蔵『宗安小歌集』である。序によれば沙弥宗安という小歌の名人の編には一八首を抜き出した写本が一点知られるに過ぎない。国文学研究資料館本は、編者宗安の依頼によって公家の久我有庵三休（久我敦通、一五六五〜一六二四）が序を付して清書したもので、原本的な性格を

持つ。書写年代（すなわち『宗安小歌集』の成立年代）は、天正十三年（一五八五）〜慶長四年（一五九九）の間と推定される。所収の小歌の中から、二首を紹介しよう。

誰か作りし恋の道 いかなる人も踏み迷ふ
思ひは草の根か さて憂やな いくたび切れど また萌え出づる

『宗安小歌集』が成立したのとほぼ重なる頃から、隆達という小歌の名手が活動し、その曲節は「隆達節」と呼ばれて一世を風靡した。隆達は人々の求めに応じて次々に小歌集の写本を作成し、現存するだけでも歌数や内容の異なる四〇点以上の本が確認され、年紀は文禄二年（一五九三）から慶長十六年（一六一一）にわたっている。諸本に収められた小歌の総数は、計五〇〇首以上に上る。伝本の数が多いことは『閑吟集』や『宗安小歌集』と対照的であるが、大半は後代の転写本で、隆達自身が本文や節付けを書いた本が残る例は稀である。

国文学研究資料館には、『隆達小歌集』の写本を三点蔵する。図版に掲出したものは一〇〇首を収める歌本で、別人の筆になる本文に隆達が節付けを加え、慶長十四年八月日の日付と署名を記した後に、二首の小歌を自筆で書き付けている。数少ない隆達の確実な筆跡として貴重である。これも二首を引く。

梅は匂ひよ木立はいらぬ 人は心
よ姿はいらぬ
雨の降る夜の一人寝は いづれ雨
とも涙とも

恋や人生をめぐるさまざまな思いを表現したこれらの小歌集は、中世の人々の「歌う心」を今に伝えている。

（落合博志）

〈参考文献〉

国文学研究資料館影印叢書『中世歌謡資料集』（平成十七年、汲古書院）